

大桑城(別名特になし)(市指定史跡)(岐阜県山県市大桑洞)(古城山)

大桑城(おおがじょう)は、鎌倉時代から戦国時代にかけて現在の岐阜県山県市にあった日本の城(山城)である。山県市大桑・青波・富永地区の境にある古城山(別名・金鶏山)(標高 408m)の山頂付近に存在した。

概要

美濃守護土岐氏の守護所が置かれた城。古城山の山頂付近が本丸であり、その南に二の丸・三の丸が続き、400m にわたって曲輪が連なっていたと推定される。現在も曲輪、土塁等の遺構が残る。南麓(現在の市場、椿野、市洞)には城下町があつて、栄えたという。城下町は越前国の朝倉氏の一乗谷城の城下町を参考にしたものであり、江戸時代まで残った。

歴史

『美濃国諸旧記』によれば、逸見義重が承久の乱の功績によって大桑郷を領地とし、子の大桑又三郎が大桑城を築いたとされる(1250 年頃か)。また、守護・土岐成頼の 3 男の土岐定頼が明応 5 年(1496 年)に改築し、大桑兵部大輔と名乗って一代限りで住んだともいう(後に大畑と改姓)。その後は土岐頼純・頼芸の兄弟が居城とした。1509 年(永正 6 年)には守護代の斎藤氏が台頭してきた事もあり、土岐氏は拠点(現・本巣市)を川手城(現・美濃高等学校付近)から福光館(現・岐阜市福光)に移し、さらに 1532 年(天文元年)に枝広館(現・岐阜県立長良高等学校付近)に移す。

天文 4 年 7 月 1 日(1535 年)、長良川の洪水で枝広館は流失したため、当主の土岐頼芸は拠点を稲葉山山麓に拠点を移した。また、土岐頼純は越前国の朝倉氏の協力で大桑城を拠点とし、城下町を開く。『美濃国諸旧記』によれば、1542 年(天文 11 年)に斎藤道三に攻められ頼芸は城を出たが、尾張国の織田信秀の仲介で和睦し帰城した。しかし 1547 年に道三が再び侵攻すると落城して頼純は討死し、頼芸も本巣郡河内(現・本巣市)に逃れ、大桑城は道三によって焼かれた。

現在

1988 年(昭和 63 年)、古城山山頂近くの大桑城本丸跡地近くにミニチュアの大桑城(模擬天守閣)が造られている。ミニ大桑城と呼ばれている。

古城山山頂からは岐阜の街を展望できるため、現在では古城山は登山・ハイキングコースとして親しまれている。

大桑城、および大桑城城下町の跡は、山県市教育委員会の手で発掘調査が進められている。

城の南西富永字相原地区には大桑城の鎮守の神として白山神社が祀られている。苔で覆われた参道を抜けると社殿がある。

登場する小説

司馬遼太郎『国盗り物語』・・・土岐頼芸の籠る大桑城を斎藤道三が攻めて追放すると書かれるなど、大桑城がたびたび登場している。

落城に関する言い伝え

斎藤道三の配下の者が大桑城への抜け道が無いかを、山のふもとに薪を拾いに来ていた青波村の餅屋の老婆に尋ねると、抜け道は無いと答えた。老婆はふと考えると、「ふもとから城の下へ向かって草木を刈り取り、枯れた枝で火道を作ればよい」と提案した。この提案により火道が作られ、老婆が刈った枝や草の乾き具合を確認し、乾いた頃合を見て火をつける合図をした。すると火はふもとから城の建物の西へ、あっという間に燃え移り大桑城は落城したという。その後、落城は青波村の老婆が関与したことを知った大桑村の住民は、青波村との嫁入り、婿取りを行わなくなったという。

Wikipedia による

金華山より北上すること約 25 分。山県市大桑地区は、天文 4 (1535) 年、美濃国守護土岐氏が守護所をそれ

までの枝広(岐阜市長良)からこの地に移した地です。標高 407.5m の頂上には大桑城が築かれ、城下町も整えられ土岐氏の政治拠点として栄えました。遺構の様子から越前朝倉氏の居城一乗谷にならったとされ、出土物からも越前との関係が伺うことができます。

その後、斎藤道三との激戦の末に大桑城は落城し、美濃の国の乱世が始まりました。

大桑城跡があったこの古城山は、現在でも道中に石垣や曲輪跡を残し、山城であった様子を見ることができます。

古城山の山頂には地元住民らによってシンボルとして設置されたミニチュア大桑城があり、真正面に金華山、天候によっては伊勢湾や伊吹山、名古屋駅の高層ビル群なども望むことができます。

また、条件によっては眼下に雲海が広がり、新たな絶景スポットでもあります。

大桑地区には現在でも当時の堀跡の遺構のほか、土岐氏とかかわりの深い寺社がありますので、美濃国守護土岐氏最後の拠点に立ってみてはいかがでしょうか。

岐阜県観光連盟による

◆ゆったりコース⇒はじかみ林道登山口から山頂まで約 750m あり、約 20～30 分で登れます。

岐阜の旅ガイドによる



ミニチュア大桑城と日の出・雲海



石垣跡

